『ミラレーパの十万歌』「聖者ガムポパの章」和訳

渡　邊　温　子

解　題

尊者ミラレーパ（mi la ras pa, 1040-1123/1052-1135）は、チベットにおいて最も有名な聖者の１人である。[1] 彼は父を早くに亡くし、母や妹とともに親戚たちから虐げられて、辛酸を舐めた。彼は母の命令で魔術を学んで親族に復讐を果たすが、自身が積んだ悪業を悔いてマルパ翻訳師（mar pa chos kyi blo gros, 1002-1097/1012-1100）のもとで苦行を行じて仏教を学んだ。[2] 彼の人生は人々の涙を誘い、宗派の垣根を越えて人気を誇っている。しかし彼自身は自らの生涯について書物を書き残しておらず、[3] 現存する壮大な伝記は、直弟子、もしくは後世になってから彼の教えの伝統を受け継ぐ弟子たちによって書かれたものである。[4] ミラレーパの直弟子でカギュー派の開祖であるガムポパ（sgam po pa bsod nams rin chen, 1079-1153）も、マルパとミラレーパの短い伝記を書き残している。[5]

ミラレーパについて書かれた伝記は数多く存在したが、現在ではその多くが失われ、数種類の伝記と詩のみしか残されていない。[6] [7] その中でも、現在最も広く親しまれているのは、ツァンニョン・ヘールカ（gtsang smyon he ru ka, 1452-1507）によって著された『ミラレーパ伝』（*rnal 'byor gyi dbang phyug dam pa rje btsun mi la ras pa'i rnam thar thar pa dang thams cad mkhyen pa'i lam ston*）と『ミラレーパの十万歌』（*rje btsun mi la ras pa'i rnam thar rgyas par phye ba mgur 'bum*）である。ツァンニョンの弟子であるグーツァンレーパ（rgod tshang ras pa sna tshogs rang grol, 1494-1570）によって著された『ツァンニョン伝』（*gtsang smyon he ru ka phyogs thams cad las rnam par rgyal ba'i rnam thar rdo rje theg pa'i gsal byed nyi ma'i snying po*）によれば、ツァンニョンは衆生の模範となるようにとの明確な意図をもってミラレーパの伝記を作成し、木版印刷して各地に配布した。[8] そして彼のこの作品をもってミラレーパ伝はその絶頂を迎えた。それ

は、ツァンニョンの著した作品の物語としての完成度の高さに加え、彼の時代に木版技術がチベットに導入されたことによるものと思われる。[9] その結果ツァンニョン以降、現在に至るまで新たなミラレーパ伝が編纂されることはなかった。

ツァンニョンはミラレーパの伝記と詩を自身が独創で創作したとは考えず、あくまでも自身を編者の立場においた。[10] もしツァンニョンの作品を彼の創作ではなく、現存していた詩と伝記を編纂しなおしただけのものであるとするならば、ツァンニョンの作品に至るまでの諸々のミラレーパ伝の編纂過程を研究することは重要となってくる。ツァンニョン以前のミラレーパ伝の研究は徐々に進められてきてはいるが、今後さらに包括的な研究が必要とされる。[11] しかしその反面、編纂過程にばかり目を向けることは、ミラレーパの、ひいてはチベットの文化の躍動性を無視しかねないように思われる。チベットの文化は、決して１人の個人が作り上げたのではなく、先人が作りだしたものに後代の人が上から積み重ね、時代の垣根を越えてみなで共に作り増殖していく文化である。それは経典や師の教えに対してもそうであり、仏教の教団においても同様である。例えば、もともとカギュー派であった寺院がゲルク派に改宗したが、改宗後も以前と同じくカギュー派の護法尊を供養し続けるといったことはけっして珍しい話ではない。チベットは何か新しいものを生み出すとき、前にあったものを破壊するのではなく、あくまでも自分の中に取り込み上から新たに塗り固めて膨張していく文化である。そのようにチベットにおける文化の発展の過程を考えた時、ミラレーパという実在した人物がどのようであったかについてのみに捕われてしまうことは、《ミラレーパ》というチベットが生み出した１つの文化を否定することになりかねない。

しかし、そのようなミラレーパの知名度にも関わらず、彼の詩や伝記の内容について詳しい研究はほとんどなされてこなかった。[12] チベットにおける文化の発展を考えるとき、ミラレーパを研究することは有意義であり、これからさらに勧めていく必要があると思われる。[13]

ミラレーパに対し、金剛瑜伽女（rdo rje rnal 'byor ma）の次のような授記がある。

「ミラレーパよ、汝に太陽の如き弟子が１人、月の如き者が１人、星の如き者

が23人、成就者が25人、不還の持明者が100人、道において煖を得る大士が108人、道に入った男女の瑜伽行者が1001人、法縁を結んだために三悪趣〔に陥ること〕から断たれた数えきれない弟子ができるでしょう[14]」

ここで太陽のような弟子と授記された人物こそが、ミラレーパの最高の弟子、ガムポパことタクポ・ラジェ（dwags po lha rje）である。以下は、ツァンニョンの編纂した『ミラレーパの十万歌』の「聖者ガムポパの章」の訳出研究である。本章を翻訳することにより、ミラレーパの弟子の育成方法の一端を明らかにすることを意図した。今後、月のような弟子と評されたレーチュン・ドルジェタクパ（ras chung rdo rje grags pa, 1085-1161）、そしてミラレーパのもとに最も長く留まった弟子であるンゲンゾン・トンパ（ngan rdzong ston pa）などについて研究を続けていきたい。

『十万歌』の内容から、ミラレーパは弟子の能力にあった教えを授けたことが伺える[15]。釈尊の説かれた教えを、順を追い、相手の理解に沿って授けたミラレーパの教示方法も、道次第として理解することができる[16]。そのような中、「太陽の如き」と称されたミラレーパの最高の弟子であるガムポパに焦点を合わせることは、ミラレーパの指導方法の中でも、特に優れた最高の教えを目にすることを意味する。しかし、ミラレーパのガムポパに対する指導方法は密教の体験におけるものであるため、文字で目にするだけでは、ガムポパが実際に体験した境地がどのようなものであったかを理解することは難しい。今後は密教の理解に裏付けされた更なる研究が期待される。

最後となったが、本翻訳に際し、大谷大学名誉教授のツルティム・ケサン氏、同大学教授の福田洋一氏、そして大谷大学真宗総合研究所西蔵文献研究班嘱託研究員である青海民族大学蔵学院教授のクンガ・ワンチュク氏より多くのご指南をいただいた。末筆ながらここに記して謝意を表したい。

凡　例

1、本和訳に際して、大谷大学大学図書館所蔵の木版本（蔵外 No.11856）を参考にし、青海民族出版社刊行の活字本を定本とした。訳内の（　）の番号は青海民族出版社刊行の活字本の頁番号である。

2、チベット語の表記は拡張ワイリー方式を採用した。

3、見出しはすべて訳者が補った。
4、訳内の〔　〕は理解を助けるため、訳者が訳を補った。
5、人物の生没年を（　）に入れたが、生没年ともに不明の場合は省略した。
6、チベット語の表現と日本語の表現とが一致しない点がみられたが、原文の雰囲気を尊重し、意味の通る範囲で出来る限り原文の表現通り訳出した。

「聖者ガムポパの章」

1　帰敬偈

ラマに礼拝します。

2　開　題

瑜伽自在者シェーパ・ドルジェ[17]の最高の弟子[18]、聖者ガムポパは、ロダク（lho brag）のラマ•マルパが尊者〔ミラレーパ〕の〔見た〕4つの柱という夢の兆しを解釈した詩で「無比なる者」と授記された[19]。本尊金剛瑜伽母も、尊者に出来る25人の諸々の成就者、太陽、月、星3つのごとき弟子たちの中でも、日輪のごとき最高の者であると授記された[20]。仏陀によっても、『三昧王経[21]』など、一般の多くの大乗教典で授記された。特に『法華経[22]』に、「アーナンダよ、私が亡くなった後、北方の地に、『比丘の医者』と呼ばれる、昔の仏に対して特になすべきことを成し、数多くの仏に侍従し、善根を起こし、増上意楽を起こし、大乗に正しく入り、多くの衆生を利益して幸せにし、多聞し、菩薩蔵を把握し、大乗を讃えて、大乗を正しく説く者が現れるであろう」と授記された。そのように、五濁の時代においてこの北方のチベットで、タクポ・ラジェという名を三界に馳せ、名声の（619）旗[23]をはためかせて、十地の理解を現前にした菩薩摩訶薩その方を、尊者〔ミラレーパ〕も光明の中でご覧になられた。三昧によって

加持され、御心の力で導かれて、〔尊者の〕御前にいらっしゃった。仏教を白昼のように明らかにされて、衆生たちを無上の解脱に導かれた〔聖者ガムポパの〕海の如き偉業のうち、滴だけでも述べよう。

3　出生と世俗生活

菩薩ご生誕の地は、チベットのニャル（gnyal）のセワルン（se ba lung）、家系はニワ（snyi ba）である。偉大な医者である父、ガーバル・ゲーポ（dga′ ′bar rgyal po）とヤンラ（yang la）の女[24]である母、サムテン・ドゥンマ（bsam gtan sgron ma）２人の間に、子が２人生まれた。そのうちの長兄であった尊者のお名前は、トンパ・タルマタク（ston pa dar ma grags）と名付けられた。父が〔尊者を〕世事に長けた者に育てあげられたので、世俗問題の和解の仕方もよく知っておられた。15歳くらいになられた時、古い密教について学ばれ、『根本秘密心髄（rtsa rgyud gsang ba snying po）[25]』『ヘルーカタントラ（he ru ka gal po）』『静忿タントラ（zhi khro′i rgyud）』『大悲幻化網タントラ（thugs rje chen po dra ba ′dzin pa′i gyud）[26]』など古い法を多くお知りになられた。また、父の教えである『薬剤八支心髄（sman yan lag brgyad pa）[27]』にも精通した最高の者となられた。それから22歳になられた時、その土地の有力者であった領主シャン・タルマウー（zhang dar ma ′od）の美しい妹を妻に迎えられて、２人の息子と娘がお生まれになった。

しかしある時、息子が死に、〔その〕亡骸を運んで戻ってくると、娘も死んでしまっていた。それから（620）数日が経ち、妻が不治の病で寝たきりとなり、どんな治療や祈禱をしても無駄だった。長い間病んで、死にかけながらも死のうとしない〔その〕枕元で、尊者は宝である金字の経をあげられていらっしゃった。その御心に、（この女はこんなに体力が弱っていながら死なないというのは、〔何か〕１つのことに執着しているのだろう）とお考えになられて、奥様に、

「有為である輪廻の本質を理解しない衆生たちは、困惑している。不幸な輪廻に留まろうとする者たちは、煩悶している。夢のようである親戚に心悩ませて、錯乱しているこれら全ての衆生を見ると、私は悲しい。お前はこんなに体力が弱っていながら死のうとしないのは、〔何か〕１つのことに執着しているのだろう。お前が、外の土地に執着しているのならば、私は僧侶が集まる場所を造ろ

う。家財に執着しているのならば、僧侶に布施し、貧しい者に施して善に用いよう。そもそも執着すべきものは何もない。私たち２人も、〔前世の〕祈願の縁で一度は出会ったが、悪業のせいでお前はこんな病を患い、私もお前も苦しい。それにお前が回復しようと死のうとも、私は真なる法を行なわなければならない」

とおっしゃった。すると奥様は、

「私は、もう間もなく死にます。土地や家、食や財産のいずれに対しても執着しておりません。しかしラジェよ、あなたに執着しているのでございます。あなたがおっしゃられたことが本当かどうか、確認したくはありませんが、仕方がありません〔今回は確認いたします〕。私の兄も呼んで来て〔お誓いください〕。つまるところ、輪廻の夫婦生活に幸せは(621)ございませんので、ラジェよ、あなたは真なる法を行ってくださいませ」

と言われた。それに対し、ラジェは、

「お前が治ったとしても、夫婦が離れないことはない。死んだとしても法のみで他のことは〔行なわないし、〕他の女の夫になりはしない[28]。誓願をたてようか？」

とおっしゃられた。奥様は、

「あなたは、他人を欺いたり嘘をついたりなさいませんが、この度は私が信じられるように、誓いをたててくださいませ」

と申されたので、〔ラジェは〕誓うことにされた。すると〔奥様は〕、

「証人が必要です」

と申されて、叔父のペルソ(dpal bsod)を証人にされた。そして宝である金字の経を頭に置いて誓われた。すると奥様は、

「ラジェよ、あなたが真なる法を行われるかどうか、私は墓穴から見ております」

とおっしゃり、〔ラジェの〕手を握って顔を凝視し、涙を流しながら息を引き取られた。

　それから尊者は財産を３つに分割して、一部を奥様の善根のために使われた。亡骸を火葬し、〔その〕骨でツァツァ[29]を作って、仏塔を建てられた。奥様の仏塔として知られるものが、現在もニェルに存在する。そして一部は善捨されて、一部はラジェ・リンポチェが法を行う糧にされた。

妻の〔亡くなった〕後に済ますべき事柄が片付いたため安心して、（さあ、法を行おう）と思われて、昼間独りでおられた。その時、叔父ペルソは心に、（私のかわいい甥は愛しい妻に先立たれた。今頃彼は、悲嘆に暮れていることだろう）と思って、肉とチャンを持ってやってきた。叔父と甥[30]の２人は、膝を突き合わせて話をされた。尊者は、

「叔父さん、私は妻が亡くなったので、（622）心安らかです」

とおっしゃられた。すると叔父は怒って、

「あんな妻は、お前がどこを探しても得られはしない！シャン・タルマウーが聞けば、怒り狂うだろう！」

と言って、一握りの灰を投げつけた[31]。それに対し、尊者は、

「叔父さん、忘れられましたか？驚きました[32]。〔あなたは〕先日の誓願の証人ではありませんか。私はちゃんと法を行うと言ったではありませんか」

とおっしゃられたので、叔父は、

「甥よ、もっともだ。私はこんなに年老いたというのに、法を顧みないとはなんと罪深い。甥よ、法を行いなさい。私が〔お前の〕家や財物が損なわれることのないようにしよう」

と言った。

4　出　家

それからラジェ・リンポチェは、親族たちに知られることなく、ペン（'phan）のプト（pu to）僧院で、ポトワ・リンチェンサル（pu to ba rin chen gsal, 1027-1105）の御前に謁見なされた。そして、

「ラマ・リンポチェ、私はニャルから、法を求めてやってきました。しばらく法門に入れさせて、法衣もお貸しください」

と申し上げられると、ポトワは、

「私には貸し出す法衣がない。お前にあれば持ってきなさい。法門にいれよう」

とおっしゃられた。そのためラジェは御心に、（私にあるなら、貸してください

と言うわけがない。一般に『秘密心髄[33]』の中で、「４つの悲心を具えたラマが、衆生を利益する。すなわち恒常なる悲心、自然と湧き起こる悲心、励まし祈願する悲心、所化という縁に出会う悲心である。それらの悲心を持つ者が衆生利

益を為す」と説かれている。〔この〕ラマは悲心が弱いようだ）と思われて、〔ラジェとポトワの間に〕前世での業の結びつきが無かったため、あまり信心が起こることはなかった。

（623）〔そこで〕一度、国へと戻り、金16サンを始めとした法を学ぶための糧を取ってこられた。そしてペンのギャチャリ（rgya lcags ri）という僧院のラマ・ギャチィルワ（rgya mtshil ba）のもとで出家して比丘となられ、名をソナム・リンチェン（bsod names rin chen）と名付けられた。それからゲシェー・シャワリンパ（shwa ba gling pa）とチャドゥルワ（bya ′dul ba ′dzin pa brtson ′grus ′bar, 1079-1154）の２人から『荘厳経論』『現観荘厳論』『阿毘達磨倶舎論』など多くの法を聴聞されて、マンユル（mang yul）のロデン・シェーラップ（blo ldan shes rab, 1059-1109）のもとで、喜金剛、秘密集会などのタントラの論説や潅頂、教誡などをたくさん受けられた。そしてゲシェー・ニュクルムパ（snyug rum pa）とギャチャリワ（rgya lcags ri ba）２人のもとでカダム派の法を全て聴聞された。そして、（さあ、修行しよう）と思われ、ギャチャリに滞在された。

それも、ラジェは智慧と悲心が非常に大きくて、吝嗇と貪欲は非常に小さく、信仰心と精進が非常に強くて、懈怠と怠惰は非常に弱かった。そのため、昼は聞思に没頭され、夜は〔掉挙と昏沈[34]を〕断じた禅定と右遶などの善行に、散漫となることなく励まれた。〔そのような状態にも関わらず〕身体の内にも外にも虫がわくことはなかった[35]。５、６日もの間、食事をとらなくとも飢えることなく、体は安楽のまま、１つの三昧の流れに幾日もとどまられた。粗大な貪と瞋を衰えさせたので、夢に『金光明経[36]』に説かれる十地を得た兆しがそのまま現れた。

それからしばらく経った時、（624）心境[37]に、青くて[38]身体が大きく、破れた麻布を肩にかけて、藤の杖を手にした行者が現れた。彼はラジェの頭に手を置き、唾を吐いて去って行った。すると止の良き三昧があった。その上、観に対する確信が生じたとの思いと、楽の感覚が生じて、智慧が集中するということが起こった。

隣の比丘にそれらの兆しについて話した。すると比丘は、

「あなたは律を受けて出家し、戒律を清浄に守っている比丘です。ですので、瑜伽行者や俗人などが現れたならば、ペカル[39]の変化身であるので、障碍が生じる危険があります。ケンボ[40]のもとで白不動のルン[41]を授かって、集会で僧侶たち

にトルマ（gtor ma）の加持をお願いしなさい。そうすれば、障碍は除かれるでしょう」
と言った。

そこで、ケンボのもとで白不動のルンを授かり、僧侶たちにトルマギャツァ[42]の儀式を頼んだ。そうして修行したので[43]、先の瑜伽行者の往来がだんだん多くなった。

その頃、尊者ミラレーパは、タクマル・ポト（brag dmar spo mtho）のキプクニマゾン（skyid phug nyi ma rdzong）で、レーチュン・ドルジェタクパ、シバウー（zhi ba ′od）、セベンレーパ（se ban ras pa）、ティゴムレーパ（′bri sgom ras pa）、ンゲンゾン・トンパなど〔尊者のもとに〕初めからおられる偉大な弟子たちと、ディン（brin）のゼセ（mdzes se）やクチュク（khu byug）など女の弟子たち[44]に囲まれて、未了義と了義の法輪を回しておられた[45]。そのとき、年かさのレーパ[46]（625）たちが、尊者に、
「今や尊者も年を取られました。もし、浄土に逝かれることがあれば、我々レーパの障害を取り除いて力を与えてくださるため、また、施主たちが福徳を積む対象として代わりが必要でございます。ですので、尊者ご自身が信頼しておられる１人の者に、諸々の教誡を余すことなく授けられるのがよろしいでしょう。そうなさらなければ、我々のこの法統で、多くの弟子を育てることができません」
と申し上げた。すると尊者は、少々気を害された様子で、
「私には、事業を広く普及させることのできる弟子がいます。その者がどこにいるか、今夜見てみましょう。明日の朝来なさい」
とおっしゃられた。

翌朝、普段よりも早く起きられた。そしてレーパたちに、
「相談があるので集まりなさい」
とおっしゃられた。レーパと女性の弟子たち全員が集まると、尊者は、
「私の教えを受け継ぎ、教誡を余すことなく授かって仏教を十方に広めることができる、戒律を授かって出家した、比丘であり医者の名を持つ者がもう間もなくやって来ます。その息子が空の白水晶の瓶を持ってやってきたので、私の白銀の瓶いっぱいの甘露を、彼の瓶にざーっと注ぐのを昨日私は夢に見ました。父が老いた時に、息子は生まれた！仏教を白昼のごとく〔明るく〕し、限りな

い衆生を利益することが出来きます。ははは」
と笑われながら、この詩を詠われた。

「(626) 尊者ラマたちに礼拝します
恩ある方〔マルパ〕に祈願します

東の白獅子の乳は
とても栄養があって、栄養豊富だが
栄養を飲む前に栄養はない
飲んだ後で栄養があるのであって、それは
帝釈天が飲んだのだ

南の虎の跳躍は
跳ぶのは高く、高いことだが
跳躍を競う前に高くはない
競った後に高いのであって、それは
ドンビヘールカ[47]の乗り物だ

西の曲線を描いて泳ぐ魚の胆嚢は
苦く、苦いが
食べる前に、苦くはない
食べた後に苦いのであって、それは
歓喜龍王[48]と安止龍王[49]が食べたのだ

北の青龍の強い力は
力強く、強力だが
力を競う前に、強くはない
競った後に強いのであって、それは
他化自在天[50]と歓喜龍王が競ったのだ

東の白獅子の乳は

宝である金の器以外
普通の劣ったどんな器にも注いではいけない
普通の劣った器に注げば
器も壊れ、栄養も漏れる

尊者ナーローパ（nā ro pa, 1016-1100）とマイトリーパ（maitri pa, 1002-1077）[51]のこの教誡は[52]
深淵で、深いが
修習する前に、深くはない
修習した後に深いのであって、それは
父、尊者マルパが授かり
ミラレーパが修習したのだ

ミラの修習、理解、言葉の３つは
役に立ち、益があるが
器でない者たちには与えない
器である者が来たら与えるのだ
息子トンパが来れば与えるのだ」

という詩（627）を詠われた。

5　尊者ミラレーパを目指す

その頃ラジェ・リンポチェは、ある日、外回りの右遶に行かれた。その年、その地方はひどい飢饉にみまわれたため、３人の乞食が門の下で〔施してもらおうと〕望みを込めて座っていた。そのうちの１人が、
「今年のような飢饉でも、ギャチャリというこの素晴らしい寺院じゃ、今朝、皆に食べ物を振る舞うという素敵な法会を開いてくださる。法会には平等に俺らみんなで参加して、自分たちの分け前を食べ終えても、あまった食べ物をいっぱいもらおう。それでチャーリ近くまで好きなだけ取ってきて、食べられたら嬉しいなあ」

と言った。１人は、
「俺はお前のより簡単だ。〔まず〕大根を煮てセワほどにする。[53] それに胡椒をふりかけて脱脂乳で量を増やし、少し酸っぱくして食べたら腹がいっぱいになって嬉しいじゃないか」
と言った。年かさの者は、
「男というのは、腹が空いても笑ってる。鳥は腹が減っても群れで飛ぶ。そんな腹を満たす話をするんじゃない。立派な比丘が、西の山を右遶しに行かれるぞ。比丘たちみんなに聞かれでもしたら恥だ。もし祈るなら、〔自分のことばかり〕小さく祈っちゃだめだ。極光浄天の系統である、汚れのない有雪国チベットで仏教を広めた法王、領主ツェデ（tse lde）のようなら嬉しいじゃないか。今生でチベットを統治したら良い。もしくは、西のラプチガン（la phyi gangs）のラワ（ra ba）に瑜伽自在者ミラレーパとおっしゃる方がおられる。〔その方は〕食は苦行と三昧（628）で暮らし、お召し物は一枚の布とトゥンモ[54]の暖かさという楽で暮らしながら、昼夜を問わず光明のマハームドラー[55]の修習に入っておられる。それに場所を移動なさる際に、空を飛んで行かれたことがあるらしい。その方の御前で、できることなら今生を投げ捨てて、彼の方と同じように修習したら嬉しいなあ。それが叶わずとも、お顔だけでも拝見することができれば良いのに」
と言って、ぼろぼろ涙を流していた。

そこで尊者の名前を聞くやいなや、どうにもできないくらい程強い信心が生じて、夜中まで卒倒して気を失っていた。正気を取り戻すと、滝のような涙を流しながら立ち上がって、尊者のいらっしゃる方角に向かって何度も礼拝しながら、
「尊者、尊者よ、慈悲でご覧ください」
と繰り返し祈願されて、善行の根本である七支供養を行われた。続けて何度も行うと、以前と違う心境と良き三昧が生じた。そのラマ尊者とお会いすることができるだろうかと思ったままで、夜が明けた。

そこで３人の乞食を呼び寄せて、彼らが想像した以上のツァンパと肉、バターなどの素晴らしい食べ物で満足させた。そしてラジェは、
「お前たちが話していたそのラマに私はお会いしたい。お前たちの中で知っている者が私の道案内をしておくれ。全財産として金16サンあるが、半分を与え

よう。それでお前〔たち〕も法を行うといい」
とおっしゃられた。すると若い2人は、
「私たちは存じません」
と言ったが、老人が、
「私が〔案内〕しましょう」
と言った。

その夜、三宝に供物を捧げて祈願(629)された。すると夢に、〔ラジェが〕ラクドゥン[56]を吹き鳴らして、その音が世界を満たした。そこで、
「今、ウー(dbus)とツァン(gtsang)の2地方で、このドゥンより大きな音はない」
とおっしゃった。それから、支えるものがないのに空に引っ掛かっていた大きな太鼓を叩いた。するとその音は大きく、本当に耳に心地よかったので、無数の人と動物が聞き入っていた。ムン[57]の人らしき女が、
「この者たちのために太鼓を叩きなさい。この動物たちにこれを与えなさい」
と言って、乳で満たされた頭蓋骨を渡してきた。
「これではこの動物たちには足りません」
と言うと、
「あなたがお飲みなさい。そうすればこの動物たちだけでなく、六道の一切衆生に行き渡るでしょう。私は西方へ行きます」
と言って去って行くという夢の兆しがあった。

後になって〔ラジェ〕は、
「今は器ではなく、地と道[58]を順々に学ぶ者たちは、太鼓を聞いた者たちです。カダム派のラマたちも恩深い。動物たちは、私の〔修習した〕山中で修習する行者たちです。ラマ・ミラレーパの教誡という方便と、マハームドラーだけで以前の夢の兆し通りとなりました[59]」
と語られた。

それから老いた乞食と連れ添って進まれた。ラジェは信仰が厚く、精進があるため、
「我がラマといつお会いできるのだろうか」

と、顔を常に涙で濡らし、旅の食事も胃に届かずに、疲れても休息も取らずに進まれた。しかし、ニャントゥー（myang stod）のツィネーサル（rtsis gnas gsar）に着くと、その乞食は病を装い、

「ああ、私にもこれから先の詳しいことはわかりません。サキャ（sa skya）という寺があるそうですから、尋ねながら（630）行ってください」

と言った。

そこで同伴者に見捨てられて、盲人[60]が平地を漂白する〔ような〕苦しみを味わわれた。〔そのためラジェは〕夜通し顔を地にうずめて、涙された。すると乞食が、

「子どもよ、ここに着いたことを間違いとは思わずに、示した通りの道を行きなさい」

と言った。

後になって、それらの物乞いは尊者ミラレーパの化身と信じられた。

それから人に尋ねながら進まれると、タンソ（grang so）のタボ峠（khra bo la）で沢山のラトゥー（la stod）の商人と出会われた。彼らに尋ねると、ニャナン（gnya′ nang）の商人頭ダワ・サンポ（zla ba bzang po）という者が、

「瑜伽自在者ミラレーパという、有雪国チベット中に名を轟かせるラマ成就者は、今はディンのチュワル（chu dbar）にいらっしゃるよ」

と言った。そこで尊者と本当にお会いできるのだと思って、喜び過ぎて商人頭の首に抱きついて号泣された。

それから更に道を尋ねてティングリ（ding ri）の方へ進まれた。大平原の真ん中に休むことができるような台があったので、そこで休憩された。すると、昨日から食べ物も召し上がらずに、お疲れだったせいで立ちくらみ、昏倒されてしまった。台から落ちて夜半まで気を失い、正気を取り戻されると、頭の先から脚の裏まで痛まぬ箇所は毛程もなく〔全身が痛んだ。〕咽もからからだったが、水を恵んでくれる者もなかったので2日間そのままでおられた。

そのため御心に、（私は今生で尊者にお会いすることはできなかった。しかし来世では、尊者がどこにいらっしゃろうともそのもとに生まれて、仲睦まじくなれるように）と祈願し、（今生、来世、中有の3つで頼れる方は（631）尊者を

おいて他にはおられない）とむせび泣いて一心に祈願された。

そうしたある日、チャユル（bya yul）のカダム派の学者が現れて、

「あなたはどちらにいらっしゃるのですか？」

とおっしゃった。

「私はティングリまで、尊者ミラにお会いしに行くところです」

と言うと、

「では、私もその方角へ向かっていますが・・・」

とおっしゃり、ラマは、

「あなたは病気ですか？」

と言われた。そこで、

「私は体調が良くありません。咽も乾いています。水を恵んでいただけませんか？」

と言われた。すると彼は椀を水で満たして、ツァンパを入れたものをくれた。するとすぐに元気を取り戻されて、彼と連れ添って進まれた。

それと時同じくして、尊者はロデタシガン（blo bde bkra shis sgang）で法を説いておられた。その時、時に黙考され、時に笑っておられた。そこで、ディンの施主でゼセーという美しい女性が、

「尊者よ、法を説いていらっしゃる途中で時に黙考され、時に笑っておられるのは、縁有る弟子に功徳が生じたのをお知りになられたのですか？それとも縁無き弟子に誤解が生じたのをお知りになられたのですか？」

と尋ねると、

「有縁と無縁の者とに、どんな善いことや悪いことが生じたのも見えはしないよ」

とおっしゃられた。

「それでは、尊者が笑っておられる理由は何でございますか？」

と尋ねると、

「私の弟子であるウーパ・トンパ[61]が、ティングリの休憩するような台の近くに着きました。しかし全身を病んで、『ラマ尊者よ、助けてくださいませ。お願いします』と言って、強い信仰と尊敬の想いから咽び泣いている。その者を憐れに思って、三昧で（632）加持をしました。〔良き弟子がやって来るため、〕嬉し

くなって笑ったのです」
とおっしゃる尊者も、涙を流しておられた。
「それでは、いつ尊者の御前にお越しになられますか？」
と尋ねると、
「明日の朝までには着くでしょう」
とおっしゃられた。
「私たちはその方とお会いする機会がありますでしょうか？」
と尋ねると、
「機会はあります。その座を誰が最初に制するか。[62] その者は三昧によって生活するようになります。その案内を誰がするか。その者は大楽である解脱の境地へと私が導きましょう」
とおっしゃられた。

それからラジェと、カダム派のチャユルパはツォンドゥ（tshong ′dus）のディンマ（sdings ma）[63]に到着された。施主の女性が機織りをしていたので、機織り機の先に来られて、
「この地に瑜伽自在者ミラレーパという方がいらっしゃると聞いたのですが、どこにおられるでしょうか？」
とおっしゃった。施主の女性は、
「あなた様はどちらからいらっしゃったのですか？」
と言った。
「私は日出るウーの国から、尊者を目指してやってきました」
とおっしゃられたので、
「それでは、私が食事を差し上げますので、家にお越しください」
と言い、〔ラジェを〕お招きして茶や黒砂糖などで手厚くもてなした。それから、施主の女性は、
「あなた様が来られることを偉大な尊者は以前からわかっておられて、未来の授記も語られました。先日、ティングリでお疲れだったこともご覧になられて、三昧によって加持もなさいました。私がご案内いたします」
と言った。そこでラジェは御心に、（そうか！私はラマが加持してくださったから死ななかったのだ。それに、私が来ることをお知りだったことからして、私

は縁ある弟子に違いない）と思われた。

〔そのようにラジェが〕慢心を（633）僅かに抱かれたことを尊者はお考えになって、慢心を取り除くために半月の間お会いになる機会を与えられなかった。セベン・トンパが食器と燃料を運び、〔ラジェは〕岩山の穴にとどまられた。

6　尊者ミラレーパとの出会い

それから〔ラジェは〕、施主の女性の娘に案内されて、尊者の御前にお越しになられた。しかし、尊者はレーチュンパとシバウーの２人を、尊者ご自身の身体として加持されて、〔３人とも尊者の姿をとっていたので、〕どれが本当の尊者かわからなかった。するとレーチュンパが、

「中央が尊者です」

と言って指差したその時、ラジェ・リンポチェも中央の方に対して、金16サンのマンダラと、一塊の茶を献じた。そしてウーからやって来た経緯などを詳しく申された後、尊者自身の業績も話してくださるように請われた。大尊者はしばらく凝視された後、マンダラの中心から本物の金を１つ空へと放って、

「ロダクのマルパよ、供養してください」

とおっしゃられた。すると不可思議な音と光などが生じた。

その時、尊者は頭蓋骨の椀にチャン[64]を満たして飲んだ残りを、

「これを飲みなさい」

と言われた。〔しかしラジェは〕比丘の装いであり〔戒律があるのと〕、弟子たちがたくさんいたので受け取られなかった。すると尊者は、

「あれこれ考えずにお飲みなさい」

とおっしゃられた。

縁起が悪くなるのではと恐れて、〔ラジェは〕残さず飲み干された。そのため〔ラジェは〕伝統を受け継ぎ、全ての教誡を〔受け取る〕器であると〔尊者は〕お知りになって、

「あなたの名は？」

と尋ねられた。

「ソナム・リンチェンと申します」

（634）と申されると、

「福徳資糧[65]を積んでやって来た、一切衆生の宝」
と３度おっしゃった。
　その時、尊者は御心に、（この我が弟子の名を聞いただけでも輪廻から解脱するだろう）と思われて、
「〔名前を〕口にしてはいけません」
とおっしゃられた。
　それから尊者はウーパ・トンパに対して、
「私を信仰して、ここまでやってきたとは素晴らしいことです。私はあなたの金と茶を好みません。私の実績はこうです」
とおっしゃり、レーチュンパとシバウーが伴唱して、もてなしの詩を詠われた。

「戯論の無い法身[66]の空に
遮り無く悲心の雲が集まる
縁ある者の帰依処である衆生の依怙尊
恩人マルパの御足に礼拝します

右におります弟子のレーチュンと
左におりますシバウーが
右から詠い、左から合わせる
ラジェよ、この詩をお聞きください

智者のおられる無垢なる仏国土に
我こそはと言う者は多いが
インド中央に名を轟かせて
太陽と月のごとく輝くのは
ナーローパとマイトリーパのお２人

父である二大成就者の御心の息子
三世諸仏の精髄が集まった
マルパ翻訳師、その方は
マンダラの主尊であるため

縁ある者を魅了して
その人の名はダーキニーが語る

その名を聞いて、私は堪えきれずに
無我夢中で御前へと馳せ
お会いするやいなや歓喜して
御足の蓮華を（635）頭でいただき
今生で成仏を得る
甚深なる教誡をお授けくださいと申し上げた

父、かの仏も
『今生で輪廻の流れを断ち切る
　鋭利な武器のごとき教誡は
　ナーローパの悲心より生ず』と語られた

私は貧しく、財産が無いので
三門に精進して、〔マルパの〕御心を満たした
三世を知る悲心で
私の熱意をお知りになり
大悲でお考えになられて
『四つの流れ[67]の諸々の教誡が
　減り、増え、余り、欠けることは決してない』と語られ
誓いを立て、授けてくださったが
『今の、仏教汚辱の時代においては
　人生に暇は無く、悪縁が多いため
　お前は学問の形のみに心捕われることなく
　修習を根本に据えなさい』と語られた

私はラマのご恩に報いるため
死の恐れに鞭打たれて
厳しく精進して修習した力により

悪い兆しと妄分別を福縁と転じた

三毒がわかれば
自然成就の三身となる
伝統の加持と証悟を
縁ある者たちに伝えるために
一切の深淵が集まった諸教誡を
トンパよ、あなたに授けるので
実践して仏教を広めなさい

ラジェの御心にそのことを留め
急がずにお寛ぎなさい

私、瑜伽行者の実績はかくのごとく
詳しい話はゆっくりとしましょう

金と年寄りとは干支が合わず
私には茶を沸かす道具がない
あなたが（636）教えの伝統[68]を保ちたいならば
私の行いを見て、私のごとく修習しなさい
この詩に対して、ラジェは返事をしなさい」

とおっしゃられた。
それに対しトンパは、
「おもてなしいたします」
とおっしゃり、ラジェが茶を沸かして捧げられた。〔それを尊者は〕とても喜んで飲まれた。そしてレーチュンパたちに、
「トンパの茶に礼をするので、茶を採ってきなさい」
と言われた。採ってきたものを沸かして、
「そこに入れる物（sdor）が必要です」
とおっしゃって、尊者が唾[69]を注がれた。すると百味の飲食となった。

それからそのチャユーパが、尊者に対して、
「加持と法縁をお願いします」
と言った。それに対して尊者が、
「加持を失わないために、何か物を捧げなさい」
とおっしゃった。すると、
「私には、何も捧げられる物がございません」
と言った。尊者は、
「お前は身体にたくさんの金を隠していながら、何も無いと言うとは、なんと恥ずかしい。そもそも信仰なき加持と、わからない教誡で何になる。それよりお前はネパールへ商売に向かっているのだからお行きなさい。〔泥棒や病といった〕障害がないように〔私が〕しましょう」
とおっしゃられた。そのためラジェは御心に、（尊者の前で偽りは通用しないから、注意せねばならない）と思われて、〔尊者が〕仏であるとの想いと決して分かたれることがなくなった。

7　修　習

それから尊者は、
「ウーパ・トンパよ、あなたは以前に潅頂を受けたことがありますか？」
とおっしゃった。そこで、以前ラマたちからどのような潅頂や教誡を受けられたか、また、心に三昧がある様などを申し上げられた。すると尊者は、
「ははは、砂利を絞っても油[70]は得られない。白ゴマから油は取れるのです。私の（637）アトゥンのトゥンモを修習しなさい。今に心の本質が見えるようになります。それを修習するのに、以前受けた潅頂が無意味というわけではありません。しかし、縁起が大切ですから、私自身のやり方で加持を行う必要があります」
とおっしゃられた。
そこで口伝流でシンドゥラマンダラ[71]に依って、〔金剛〕豚女（phag mo）の加持をされた。それから教誡を授かり、修習されたので素晴らしい心境が生じた。しかし、以前のラマたちのお言葉を思い出されて、見解、修習、行について様々な疑惑が頭に浮かんできた。そこで尊者に疑惑を断ち切ってもらうため、見解、

修習、行の諸々の重要点を尋ねられた。尊者は、全ての疑惑を取り除かれてから、一般には密教、特にこの成就の伝統の特徴を述べられて、この詩を詠われた。

「見解を把握するには、己の心を見よ
心と別に見解を探せば
小人[72]の財産を探すようなもの
ああ[73]、ラジェ・トンパよ

修習を把握するには、昏沈と掉挙を取除くな[74]
修習の昏沈と掉挙を取り除けば
昼間に灯明を灯すようなもの
ああ、ラジェ・トンパよ

行を把握するには、取捨に偏るな
行の取捨に偏れば
蜜蜂が蜘蛛の巣にかかるようなもの
ああ、ラジェ・トンパよ

誓願を把握するには、自信を持て
守らない誓願を他に探し求めれば
河が逆流するようなもの
ああ、ラジェ・トンパよ

果を把握するには、確信を起こせ
得なき果を他に求めれば
蛙が空に向かって跳ぶようなもの
(638) ああ、ラジェ・トンパよ

ラマを把握するには、己の心に尋ねよ
心の他にラマを求めれば

それによって己の心を捨てるようなもの
ああ、ラジェ・トンパよ

そうすれば一切の現れは己の心に集る
ああ、ラジェ・トンパよ」

と詠われたので、その通りだと思って、精を出して修習された。

すると最初の夜、洞窟の入口で裸で修習したので、大楽の熱が自然に燃えた。明け方眠りに落ちると、身体が石のようになった。それから７日間修習したので、大楽の熱が自然に燃えて、五仏[75]のお顔が見えた。〔それらを〕ラマに申し上げると、

「目を細めて見ると月が２つに見えるのと同じこと。五大種[76]のルンを扱えるようになったのです。悪くも善くもありません」

とおっしゃられた。善いことではないと言われたが、喜びを感じて修習して、３ヶ月が過ぎた。

そうしたある明け方、この三千大千世界が輪を回したように回っていたので、空の胃で何度も吐いて、長い間昏倒した。それからラマに申し上げると、

「人体左右にある脈管[77]のルンが中央脈管に入ったのです。悪くも善くもないから修習しなさい」

とおっしゃられた。

またある朝、大悲観音菩薩が現れたり消えたりし、全ての〔大悲観音菩薩たちの〕頭上に月があるのが見えた。それらをラマに申し上げると、

「頭上の大楽のチャクラにティクレ（thig le）が増えたのです。悪くも善くもないから修習しなさい」

とおっしゃられた。

またある夕方、黒縄地獄が見えたことに端を発して（639）怒りが生じた。ラマに申し上げると、

「瞑想の紐が短かったせいで、脈管が縛られたのです。少し長くしなさい。上に向かうルン（gyen rgyu'i rlung）を扱えるようになったのであって、全く悪くも善くもないので修習しなさい」

とおっしゃられた。

ある日、六欲天の諸神がはっきりと見えて、上の神が下の神に甘露の雨を降らせていた。神たちは満足していたが、自分の母は干涸びて死んでいるのが見えた。ラマに申し上げると、

「甘露が降ったことは、咽の受容脈管のチャクラに人体左右にある脈管のティクレが増大したのです。母が干涸びていたのは、中央脈管が開いていないなので、このトゥンコル[78]をしなさい」

とおっしゃられた。

力を入れてトゥンコルを修習することを教わって、1ヶ月行った。すると、絶え間なく身体が飛び跳ね、震え、揺れたくなり、吠えたくていてもたってもいられなくなった。霊〔に取り付かれたのか〕と思って、ラマに申し上げると、

「心臓のダルマチャクラにティクレがいっぱいになったのです。トゥンコルをやめることなく修習に努めなさい。悪くも善くもありません」

とおっしゃられた。

それから、食べ物をたくさん食べなくてもよくなった。ある日、目の前の空で日食と月食が起こった。そのラーフラには馬の尻尾のように小さなものが2つあった。ラマに申し上げると、

「中央脈管に人体左右にある脈管のルンが入ったのであって、悪くも善くもありません。勇気を持った人です。今だ、今だ」

と3度おっしゃった。

それから無我夢中で修習したので、ひと月経つと赤いチャクラサンバラのマンダラが見えた。ラマが「今だ、今だ」とおっしゃったのはこの守護尊（640）のことだと思って、申し上げると、

「心臓のダルマチャクラに母からもらった血が動かなくなったのです。善くも悪くもありません。一生懸命修習しなさい」

とおっしゃられた。

再び努力して修習したので、ある日、ルイーパ流[79]のチャクラサンバラの髑髏が見えた。ラマに申し上げると、

「幻身のチャクラがティクレでいっぱいになったのです。悪くも善くもありません。修習しなさい」

とおっしゃられた。

それから努力して瞑想した。14日が経つと、一晩中自分のこの身体が空程に

広がった。そして頭のてっぺんから足の底まで六道の衆生たちがいて、ほとんどの衆生は乳だけを飲んでいた。〔また〕ある衆生は星から乳を絞って飲んでいた。どこから生じるのかわからない、がやがやした大きな音がずっと聞こえた。しかし夜が明けて、瞑想の紐を解くと消えた。ラマに申し上げると、

「身体の不可思議な千の脈管の中に、ルンがティクレを導いたのです。そのルンは智慧のルンに変わるとわかっています」

とおっしゃった。そして最高のトゥンモを授かって修習した。するとある日、地上全てが煙でけむり、午後になって真っ暗になってしまった。道もわからずに、盲人のようにラマの御前へとたどり着いた。するとラマは、

「何も間違っていません。少し留まってから修習しなさい」

とおっしゃり、先の障害を取り除いて下さったので、夜が明けたようになった。

それからまたある夜、自分の身体に血と肉がなく、たくさんの骨髄がつないでいる（641）骨格に見えた。ラマに申し上げると、

「ルンを荒くし過ぎです。優しくしなさい」

とおっしゃられた。

8　ラジェの夢解釈

それから夕方に守護尊の真言を唱え、夜中にグルヨーガを行い、幾度も祈願した。そして夜明け前に、命根のルン[80]を修習した。朝、太陽が登ってすぐに少しだけ眠ると、これまで薫習した習気の無い夢に、24の徴が生じた。そこで目が覚めて、これらの夢は良いのだろうか悪いのだろうかとお考えになって、わずかに妄分別が起こった。再度お考えになられて、仏そのものであり、一切智者であるラマ尊者にもう一度お尋ねしなければと思われて、湯を沸かす間もなくすぐに出発された。

尊者はチュワルのダクツァ（brag rtsa）で、わずかな布を被って寝ておられた。そこに礼拝して、

「尊者よ、本当に大変なのです。お眠りにならず、どうか起きてください」

と申し上げた。すると尊者は、

「あなたに妄分別が生じたことを、私は今朝心の現れに見ました。さあ、どんな良くないことがあったのか話してみなさい」

とおっしゃられた。そこでラマ・リンポチェに、夢の徴をお聞きいただいて、それらが善いか悪いか尋ねるために詩にして捧げられた。

「尊者、悪を断ち善を行う瑜伽行者
素晴らしい木綿をまとう方
如意宝の頭飾りであり
皆が尊敬する対象
御名はミラと普く知られ
その名の（642）名声は十方に満つ

その名を聞いて、私は喜び
東方の昴の下から乞い求め
身体に寒暖も顧みず
常啼菩薩（rgag tu ngu）の偉業のごとく[81]
尊者レーパ、あなた様といつお会いできるだろうかと思って
遠い道のりで苦行を行じ
２日半行ったところで
意識不明に陥った

けれども強い信解の力によって
東方の衆香市（spos ldan grong khyer）で
〔常啼菩薩が〕法上菩薩（chos ʼphags）に直に出会われたように
最高の聖地タシガンで
父、尊者レーパ、あなた様とお会いして
我が願いはとうとう叶ったと思い
喜びすぎて、毛が逆立った

幻のごとき財産の捧げ物はありませんが
輪廻の法が嫌になり
道である生死２つに恐れおののいて
世俗を捨て

修行の心が真に生じたことは
尊者よ、あなた様が悲心の錫杖で摑んでくださったのです
そのことを忘れずに、己の心に刻み込みました
グル尊者よ、臣下は申し上げることがございます

昨夜、守護尊の真言を唱え
夜中、尊者を祈願し
その後、命根のルンに努めました
今朝、陽がまさに明けようとし
わずかに眠りに落ちた時
以前薫習した習気からではない
これらの不可思議な夢を見ました

襞のある夏帽子、
火のように赤く美しく
鷲の羽の付いたものを
自分の頭にかぶっているのを夢見ました

涼しく[82]青い荘厳な靴、
銅でつま先を飾り
釦と銀のとめ輪が（643）対で美しい
その一組の靴を履いているのを夢見ました

金の刺繍がほどこされた白綾の衣、
黄色い襟周りにドロン[83]が描かれ
細い赤糸が本当に美しい
その衣を身につけているのを夢見ました

ムン産の布帯、
花々を刺繍して
絹で連ねた真珠がたれさがる

それで弓、刀、槍を腰に結び付けているのを夢見ました

白い羊毛、
裁断されておらず
丸い銀の飾りが付いたもの
その不思議な服を身につけているのを夢見ました

栴檀の杖、
七宝がはめ込まれ
握りに金の編み目がついたもの
それを右手に持っているのを夢見ました

定義通りの金剛カパーラ、
金色の甘露で満たされ
己の碗にしようと思って
左手に持っているのを夢見ました

色とりどりの荷袋[84]、
中に白米を注ぎ
己の法の糧にしようと思って
右肩にかけているのを夢見ました

羚羊[85]の皮、
頭と四肢がそろい
己の敷物にしようと思って
左肩にかけているのを夢見ました

そして右を眺めて
黄金色の素晴らしい草原に
たくさんの子ヤクと羊が草を食みに散らばっており
私が番をしようと思うのを夢見ました

そして左を眺めて
綺麗な草のあるトルコ石の湿地の草地[86]に
色とりどりの花が美しく咲き乱れ
たくさんの女が礼拝しているのを夢見ました

真ん中の金色をした花のところに
（644）黄金色した大きな葉の
蓮華が集まった座の上で
結跏趺坐しているのを夢見ました

前に泉が湧くのを夢見ました
後ろに後光が差すのを夢見ました
身体から強い炎が燃え上がるのを夢見ました
心臓に太陽と月が昇るのを夢見ました

これらの不思議な夢が生じました
良い徴であるか悪い徴であるか説明できません
尊者、三世をお知りの瑜伽行者よ
この意味がわからないので、どうかお説きください」

というそれらの夢の兆しを申し上げられた。尊者は、
「息子、ラジェ・トンパよ、不安がる必要はありません。心おだやかにくつろぎなさい。妄分別の罠に我執の中綿を入れてはいけません。迷いの結び目を解き、〔所取、能取という〕二取の縄を細い箇所でお切りなさい。習気の塵の積もった座布団は、薄くしなさい。あれこれ考えたりせず、心を本来の状態におきなさい。私は幻身に熟達した瑜伽行者ですので、夢を説明することも夢を変えることも出来ます。夢の本質で〔これはこうだと〕決めることができるという確信がありますし、そもそも私は夢の真実がわかっています。息子よ、あなたが語ったそれらの兆しの意味を、この度、老いた父である私が言葉仔細にわかりやすく説きましょう。心散漫とならずに、注意深く集中してお聞きなさい」
とおっしゃり、尊者は〔ラジェが〕夢を申し上げられた返答を、詩で返された。

「返答の詩が口をつく、ラジェよ
注意深く聞いて、心を集中させなさい

息子はザンカル流[87]のチャクラサンバラを学び
ウーの上方（645）でカダム〔の教え〕を学んだという
良き場所で修習した三昧をもつ

それは全て素晴らしいと思うが
習気から現れた夢の
兆しをわざわざ捉えて、心奪われるとは
息子よ、本当に知識がないのか、嘘をついているのか
顕密の論書をご覧にならなかったか

了義の波羅蜜において
夢は真実ではなく
空虚で空ろで無意味であり
真髄がないと釈迦牟尼は説かれた

同じく幻についての八つの喩え[88]で
前と同様に広く説かれた
その意味がおわかりにならなかったか

しかし、今回のその兆しは
未来の授記であるので素晴らしい
私、夢に精通した瑜伽行者は
幻の意味を説くことができる

白い帽子を頭に被っていたのは
見解で、ティクレが上り下りする[89]徴
中国女の絹が付いていたのは
法性が甚深で、難解なことを示す

炎のようなあざやかな赤は
教派をそのまま守る〔徴〕
鷲の羽が揺れていたのは
見解の最高であるマハームドラーが
無生の本質であると悟る徴

涼しい靴を履いていたのは
〔金剛〕乗で、滴が上り下りする徴
青く、継ぎがあてられていたのは
果である四身を得る徴
二資糧を積む徴である

あざやかな銀の釦ととめ輪は
行の間違いを断じたために
放逸で自分勝手とならず
若い菩薩のごとく
不放逸に美しく行う徴

白絹の衣をまとっていたのは
己の心が過失にまみれていない徴
襟の純金の紐は
（646）変わらない良心の徴
赤い縦縞模様は
愛で衆生を利益する徴

ムン産の綿帯で
腰に弓、刀、槍を結び付けていたのは
心に三律儀[90]をもつ徴
白い花の飾りが美しく
絹で真珠が連なっていたのは
三蔵で荘厳されて

所化の信仰を引き出す徴

栴檀の杖は
己が望んだ通りの師を得る徴
七宝がはめ込まれていたのは
尊者ラマたちの智慧を表す
握りの金の網は
重要な口伝の教誡で
弟子を育む徴
右手に持っていたのは
楽から楽へと道を進んで
浄土へ逝かれる徴

定義通りの金剛カパーラは
本性が空である徴
甘露の栄養で満たされていたのは
心が大楽のまま過ごす徴
金色に光輝いていたのは
形象が光明である徴
己の碗にしようと思ったのは
それら３つは１である徴
左手に持っていたのは
実践と離れない徴

色とりどりの荷袋は
何が起ころうとも道と運ぶ徴
２つを一緒に肩にかけていたのは
方便と智慧の双入によって
大乗の道を進む徴
中の白米を
己の法の糧にしようと思ったのは

命縮まることなく
三昧の食事で生きる徴

左肩の羚羊の皮は
意識が散乱しない徴
〔羚羊に〕五体揃っていたのは
菩提心に心が慣れ親しみ
四無量を学んだために
六道の苦しみを取り除く徴
自分の敷物にしようと思ったのは
空性[91]と悲心は区別がないという
悟りが心に生じる徴

そして右に眺めた
黄金色の素晴らしい草原は
内外の功徳が増大する徴
子ヤクと羊が草を食むために散らばっていたのは
法と財物で
衆生の望みを満たす徴
自分で番をしようと思ったのは
苦しみで寄る辺なき者たちを
悲心によって離すことなく守る徴

そして左に眺めた
綺麗な草のあるトルコ石の湿地の草地は
無漏の三昧に心が慣れ
歓楽の智慧が見える徴
色とりどりの花々で飾られたのは
熱の徴が際限なく次第に立ちのぼり
様々な体験が生じるという徴
たくさんの女が礼拝したことは

脈管とティクレに住する
ダーキニーを支配する徴

真ん中の金色をした花のところは
三昧の知識にたくみで
清浄な戒律で良く飾られた
出家者たちが天の雲のごとく
あなたの周りに集う徴

黄金色した大きな葉の
蓮華の集まった座も
智慧によって輪廻に住さないため
蓮が泥で汚れないように
輪廻に汚れない徴
結跏趺坐していたのも
悲心から寂静に住さないため[92]
（648）若い菩薩のごとく
母である六道の衆生のため
化身で衆生を利益する徴

前に泉が湧いていたのは
法の偉業が盛んになる徴
後光が差していたのは
チベット世界を白くする徴
身体から強い炎が燃え上がったのは
大楽の熱であるトゥンモの智慧で
妄分別の氷が溶ける徴
心臓に太陽と月が昇ったのは
往来のない光明の
状態で常にある徴

息子よ、夢は悪いものではなく良い夢である
後に起こることを授記した
良き兆しであると説いたが
そもそも現われたどんな夢も
相として捉えれば障害となり
幻と知れば道となる

夢の本質を知らない者は説くことが出来ない
良き夢は悪い兆しで悪と説く
夢に本当に精通したならば
悪い夢は良き兆しで善と説く

そもそも、どんな悪いことも良きことも
最高であると思ってはいけない、善男子よ
あなたは比丘の心にそうとどめなさい」

と詠われ、
「おお、息子、ラジェ・トンパよ、今回あなたに生じたそれらの兆しは、未来の授記であり、法が心に生じる兆しです。老いた父である私は説明できるので、仔細に解釈しました。説明したそれらの徴の意味を忘れてはいけません。後になって、語ったことが本当か偽りであるか判断してください。本当だったなら、私に対しても今と似ても似つかない、素晴らしい信仰と尊敬がそのとき生じるでしょう。息子よ、あなたにも、心の本質は作られたものではないと見える優れた智慧がそのとき（649）生じるでしょう。今生で生死から解脱します。そもそも、息子よ、あなたが真の瞑想者になるつもりがあるならば、夢の兆しに対してあまり執着してはいけません。邪魔になります。ラマのお言葉と己の確信以外、他人の話を聞いてはいけません。心の本質を確定出来ない原因です。周りの友の欠点を見てはいけません。誤った分別を増やしてはいません。本物ではない形だけのことをしてはいけません。他人の心を分からずに堕罪を犯す原因です。そもそも私たちは今、生死の中有で錯乱した現れを夢に見て拡げています。昼間行った習気は、夜眠りにつくと識の錯乱として現れます。夢の中有

は幻で真の錯乱です。習気に慣れることが究極となれば、輪廻の中有で苦受楽受を経験します。それを清浄にするために、今、夢と幻身を訓練して、能力を完成させたならば、中有が受用身に変化することがわかるので、精を出して修習に励んでください」
とおっしゃった。それに対して、ラジェは、
「様々な中有において、教誡を簡単に実践する方法をお教えください」
と請われたので、尊者はこの詩を詠われた。

「尊者、ラマたちに礼拝します
殊に恩ある方〔マルパ〕に、帰依します
息子よ、あなたが祈願したので
今、中有について詩で応じよう

一般に、三界を輪廻する有情と
涅槃した仏の２つは
本性として（650）１つ
見解の中有はそうとわかりなさい

様々に生じる白赤[93]と
言い表せない心の本質の２つは
区別できない原初の状態[94]では１つ
修習の中有はそうとわかりなさい

様々な迷乱した現れと
不生である自己の心の２つは
無二であり俱生として１つ
行の中有はそうとわかりなさい

昨夜の習気から起こった夢と
目覚めて嘘だと知ることの２つは
幻のような状態では１つ

夢の中有はそうとわかりなさい

不浄なる五蘊と
清浄なる五仏の２つは
無分別な究竟次第では１つ
道である生起次第、究竟次第の中有はそうとわかりなさい

方便から生じた父タントラと
智慧から生じた母タントラの２つと
潅頂の三つは俱生としては１つ
重点の中有はそうとわかりなさい

自利である変わらない法身と
利他である滅さない色身の２つは
区別できない原初の状態では１つ
三身の中有はそうとわかりなさい

不浄な幻身の産門〔である心〕と
清浄な尊格の姿の２つは
中有の光明の状態では１つ
果の中有はそうわかりなさい」

と詠われた。

9　三大弟子の夢解釈

続いて尊者は、ウーパ・トンパとドルジェ・タクパ、そしてシバウーに対し、「あなたたちは、今宵夢を見てきなさい。明朝、老いた父である私が夢を解釈しましょう」
とおっしゃられた。

そこで、それぞれが夢を見みた。朝、シバウーが最初にやってきて、尊者に

対し、
「昨夜私は良い夢を見ました。東から（651）温かい太陽が昇って、私の心臓に沈むのを夢見ました」
と言った。レーチュンパは、
「私は、大きな３つの谷を訪れて、大声を出すのを夢見ました」
と言った。ラジェは泣きながら、
「私はとても悪い夢を見ました」
と申されたので、尊者は、
「良い夢か悪い夢かわかりません。話してみなさい」
とおっしゃられた。
「私は種々様々な限りない生き物の命を奪い、その息を嚙んでいるのを夢みたのです。私は悪業と罪が大きいのです」
と申されたので、
「息子、トンパよ、泣く必要はありません。手をお貸しなさい」
とおっしゃり、尊者は手を取られて、
「息子よ、あなたは期待を裏切らなかった。一切衆生は輪廻から解脱することをあなたに託している。また〔あなたは〕その通りにしてくれるだろう。父が老いたまさにその時、息子が生まれたのです。仏教に対してなすべきことをなすでしょう」
とおっしゃられた。
「シバウーの夢は中くらいです。お前の発心は小さいため、有情利益を広大には行えないが、浄土に逝くでしょう」
とおっしゃられた。
「レーチュンパよ、お前は頑固なため私の言いつけを３度破った。そのため３つの谷で、遠くまで知られるゲシェーに３度〔生まれ〕変わるでしょう」
とおっしゃった。

10　修習の完成

それから、ニャルのラジェは、再び無我夢中で１ヶ月間修習された。すると、まず七仏薬師如来[95]のお顔が見えた。そして１日に１呼吸で十分となって、ルン

を外に出すともとに戻った。午後になってルンを入れると、受用身のたくさんの浄土が見えた。そのため心が散漫となり、ルンを外に出すと（652）真夜中になっていた。ラマの三昧を妨げることを恐れて、夜に伺わなかった。

明け方になってルンを入れると、釈尊が千仏の主となっておられるのが見えた。そうして夜が明けると、ラマのもとに参じて礼拝した。しかし、それら全てを申し上げるまでもなく尊者は、

「今、守護尊のお顔が見えて、受容身と変化身の２つが直接見えたのです。法身はもう間もなく見えるでしょう。父は年老い、息子よ、本当はあなたに側にいて欲しい。しかし祈願の関係があるので、息子よ、あなたはウーに行く必要があります。ですから、そこへ行って修習しなさい。それら先の障害は、私が取り除きました。今度は、神通力の障害があります。神通力が出ると天子魔(lha' i bu'i bdud）がやってくるので、固く秘密にすることが重要です。一般にも密教は秘密にすることによって成就するのですから、秘密裏に成就しなさい。まずもって利根な者に魔は入り込みません。あなたも利根ですから、魔は入り込まないでしょう。有情に利益があるので教団をつくりなさい」

とおっしゃられた。

「教団はいつつくるべきでしょうか？」

と尋ねると、

「心の本質が見え、ずっと安定して続くようになります。そうなれば今と似ても似つかない心の本質をはっきりと見る智慧が心に生まれるでしょう。その時、老いた父である私に対しても、仏そのものとして見る不動の確信が生じるので、その時に教団をつくりなさい。ルンが指先に入ればルンの障害が遠のくので、入るかやってみなさい」

とおっしゃられた。

平石の上に灰を積んで、指を差して（653）ルンを〔指先に〕集中させた。すると、真夜中頃、灰がわずかに動いた。朝になって、ラマの前で、そのようになりましたと申し上げると、

「脈管とルンに自在となったわけではないが、ルンに関して堪能になったのです。幻と変化など最高と共通の神通変化[96]をどちらも得るでしょう。さあ、もはや私と共にいる必要はないのでお行きなさい。ここから東の方角にガムポ・ダルギリボ（sgam po gdar gyi ri bo）という、王が玉座に座しているようであり、

頂上は五仏宝冠に似、私の帽子のようでもあり、草木は金のマンダラが置かれたようで、前の山は宝を積んだよう、そして大臣が礼をしているような７つの山があります。その山の中腹にあなたの所化がいるので、そこに赴いて有情を利益しなさい」
とおっしゃり、この詩を詠われた。

「息子、ウーパ・トンパはウーに行くか行かないか
トンパがウーに行けば
時として食を想う
食を想えば
無漏の三昧を食として食して
美味や甘さは全て幻とわかり
現れ全てを法身として実践しなさい

時として衣を想う
衣を想えば
トゥンモの暖かさという楽を衣とまとって
やわらかく美しいものは全て幻とわかり
現れ全てを法身として実践しなさい

時としてふるさとを想う
ふるさとを想えば
法性を心のふるさとと捉えて
ふるさとは全て幻と知り
現れ全てを法身として実践しなさい

時には財産を想う
財産を想えば
七聖財[97]を財産と（654）捉えて
財産は全て幻と知り
現れ全てを法身として実践しなさい

時には友を想う
友を想えば
自然の智慧を友として頼って
友人は全て幻と知り
現れ全てを法身として実践しなさい

時にはラマを想う
ラマを想えば
離れることなく頭上におられると考えて
忘れずに心の中心で修習しなさい
ラマも幻、夢である
そもそも一切は幻であると知りなさい

東のガムポ・ダルギリボは
王が玉座に座すようで
裏の山は白い絹を掲げたよう
前の山は宝を積んだようで
頂は五仏宝冠のよう
７つの山は大臣が礼をするようで
草木は金のマンダラのよう
その山の中腹に所化がいる
あなたはそこに赴き衆生利益を行いなさい
息子よ、あなたは衆生利益を成就しよう」

とおっしゃり、
「あなたの名も、比丘持金剛、ザムリン・タクパ（'dzam gling grags pa）である」
とおっしゃられた。
それから灌頂と加持の指示を与えて、一切法を完全に授けられた。そして金色の薬壺に唾液を垂らしたものと、１つの火打金を贈り物として渡された。そして、
「さあ、故郷へ赴き修習しなさい」

とおっしゃられた。

11　旅立ち

ラジェが授記された通りウーに戻られるのを、尊者もチャムポチェ（phyam po che）まで見送りに行かれた。そして、石橋のこちら側に座られて、

「ウーパ・トンパよ、縁起の（655）原因で、私はこの河の向こう岸には行きません。私たちは父と子の任務交代をここでしますから、負った荷を降ろして座りなさい」

とおっしゃり、

「ウーパ・トンパよ、あなたは父の家系の傲慢を捨てなさい。[98] 親族のつながりを断ち、今生の船の縄を断って〔船が流れていくように執着の縄を断ち〕山の人となりなさい。一切法を共にまとめて実践しなさい。[99] 老いた父である私に対しても祈願しなさい。他には三毒が大きい人と連れ立ってはいけません。その影に掛かってしまいます。なぜかと言うと、現れが敵として立ち上る人、法と一切の人に対し、悪く言うことを考えている人がいるからです。その人の内では、怒りが炎のように燃えています。譬えば、蛇には翼がなく、手足もありません。蛇より弱く小さいものはいないのに、それを見ると人々は恐れを抱きます。それはその内に大きな怒りを持っている徴です。内で激しく怒っているから外の全てが敵として立ちはだかるのです。またある人は、穴があいた石や曲がった木までも蓄えています。[100]『老いれば老いの生活の糧が、死ねば墓場のお供えが必要だ。財産がなければ法もない。資糧を積むにも財産が必要だ』と言いって、借金と利息などの邪命のみを行っている。その人の心では欲望が煮えたぎっています。またある人は、『今は正しきことを修習する時ではない。悲心を修習しないので声聞に陥り、方便を蔑ろにして断見を持っている』と語る。その人の心は、無知が闇のように覆っている。(656)そのような人と話してはいけません。話をすればまずは、『あなたの先生は誰ですか？宗派は何ですか？』と言ってくる。そして彼は怒り、聞いても心の狭い人は、これを捨てろと言う。捨てて帰依処が無くなった人は無限地獄に堕ちる。そのようになると、自分のせいで他人の心に罪を積むので、三害を広げる人と交わってはなりません。「声聞に７日住する」[101]という意味はそれです。ともかく、傷ついた動物や、鳥のよ

うに警戒しなさい。寂浄で柔和であり、吝嗇を抑えるべきです。忍耐強くあるべきです。一切の者たちと睦まじくあるべきです。非常に清潔に保つべきです。妄分別を非常に少なくすべきです。口は茶や酒、読経に散漫とならずに、山篭り、無言と封印の３つをずっと行じなさい。己の心が仏であるとわかっても、ラマである金剛阿闍梨を捨ててはなりません。資糧を積み、罪を清めて清浄であっても、少さな資糧から積みなさい。業果が虚空のごときとわかっても、小さな罪でも控えなさい。等引と後得がなくても、四座瑜伽を絶えず実践しなさい。自他の区別がないとわかっても法と人に対して、無いのにあると言ってはなりません[102]」

とおっしゃられ、

「息子よ、あなたは卯年馬月の14日[103]までに私のもとに戻ってきなさい」

とおっしゃり、この詩を詠われた。

「息子よ、離戯論が心に立ち上る時
言説に追随してはならない
世間八法[104]の足枷にはまる恐れがある
息子よ、傲慢になってはいけない
（657）わかったか、ウーパ・トンパよ

息子よ、自己の解脱が内から立ち上る時
論理学の論証式を用いてはならない
無意味な精進となる恐れがある
息子よ、無分別でありなさい
わかったか、ウーパ・トンパよ

息子よ、己の心が空性とわかった時
一と多とに分けてはならない
断空に陥る恐れがある
息子よ、無戯論でありなさい
わかったか、ウーパ・トンパよ

息子よ、マハームドラーを修習するとき
身口の善行に努めてはならない
無分別な智慧が消散する危険がある
息子よ、作りものではない本来の状態でありなさい
わかったか、ウーパ・トンパよ

息子よ、兆しと授記が生じたならば
特に喜び満足してはならない
魔の授記が生じる危険がある
息子よ、気にせずありなさい
わかったか、ウーパ・トンパよ

息子よ、自身の心を決決するとき
貪欲を生じさせてはならない
喜び満足して邪魔になる危険がある
息子よ、希望なきままありなさい
わかったか、ウーパ・トンパよ」

とおっしゃり、尊者の御足をラジェの頭上に置いて、
「ウーパ・トンパよ、あなたに4つの灌頂を一座の間で授けたので喜びなさい。尊格の灌頂を身体に授けて、身体を尊格のマンダラとして加持しました。真言の灌頂を口に授けて、口を真言として加持しました。法の灌頂を心に授けて、心が不生の法身であるとわからせました。ラマの御足を頭上に置いて、〔授けた〕内容に精通した金剛阿闍梨の位を授けました」
とおっしゃった。そして三昧の（658）灌頂を授けられて、
「さあ、甚深なる我が教誡を与えるのは惜しい。お行きなさい」
とおっしゃり、尊者はそこにお座りになった。
〔尊者は〕ラジェを河の向こう岸に行かせたが、再度聞こえるところから呼ばれ、〔自分の〕前に戻ってこさせた。
「教誡は惜しいが、あなたに与えなければ誰にも与えることができないので教えましょう」

とおっしゃられた。ラジェはお喜びになって、
「それでは、マンダラが必要でしょうか」
と申されると、
「マンダラはいりません。あなたは無駄遣いしない方がいい。口訣はこれです」
とおっしゃり、着物をめくって、黒い腫れ物のようになった臀部を見せられた。
「修習することよりも深い口訣はありません。私も尻がこんなになるまで修習したので、智慧が心に生じたのです。あなたも精進して修習しなさい」
とおっしゃった。

ラジェは己の心に刻み込み、ラマが授記された通り東方に赴かれた。タクラ（dwags lha）のガムポで仏教と有情利益を広大に成された経緯は、ガムポパご自身の伝記に詳細に述べられている。

それから、尊者はチュワルに赴かれた。僧侶と弟子たちが集まったので、
「ラジェ・トンパは多くの衆生に利益をなすだろう。昨夜夢の中で、私のもとから一羽の禿鷹がウーの方へと飛び立っていった。そして大きな山の頂に舞い降りたので、方々から沢山のガチョウの眷属が集まった。しばらく経って、各々あちこちに散らばったガチョウにも、それぞれ500ほどの眷属が集まってきて、全ての国土を満たすのを夢みた。私は瑜伽行者である（659）が、後に多くの出家者も出るだろう。私は仏教に対して、成すべきことをなしたのだ」
とおっしゃって、大変お喜びになられた。

大尊者の最高の愛弟子、聖者ガムポパの章である。

註

1　同世代の行者たちと比べて、現在でもミラレーパが抜きん出た知名度を誇ることは、ツァンニョン・ヘールカの功績によるところが大きい。むしろミラレーパの有名さはツァンニョンによって作り出されたとも言える。（don grub rgyal 49）

2　渡邊　2010.

3　ミラレーパは施主の女性の問いかけに対して応えた詩の中で、「黒い文字で書かれた経を読んだことがない」（*mgur 'bum*, p.371）と詠っている。これをそのまま字義通りに取ることは出来ないが、少なくとも彼が読み書きを好まなかったことは推測できる（kun dga' 2006, 22）。

4 いくつかの詩はミラレーパの在命中に文字に起こされたであろうと推測される（kun dga' 2006, 19）。しかし、ミラレーパの詠んだとされる詩のいくつかは、弟子のンゲンゾン・レーパやシバウーが詠んだのではないかとする疑いもある（grags pa rgyal mtshan 278; don grub rgyal 36-37; Martin 2001, 118）。

5 *mar pa dang mi la ras pa'i rnam thar.*

6 mgur. 仏教について詠った宗教歌。『ミラレーパ伝』と『十万歌』に出てくる詩は、mgur のことを指す。mgur は中国語では「道歌」と訳されるが、チベット語の mgur と若干意味合いが違うため、今回は「詩」の字を当てた。ミラレーパはインドのドーハのような歌い方ではなくチベットの人々にわかりやすい口語や方言で仏教の教えを詠ったことが、彼の歌が民衆に広まっていった大きな要因んであると思われる（kun dga' 2010, 2）。

7 *rnam thar nyi ma'i 'od zer* によると、1,118,000もの詩が存在していた（*rnam thar nyi ma'i 'od zer*, 57b）。

8 *rnam thar nyi ma'i snying po*, 68b; don grub rgyal 43-48.

9 don grub rgyal 51-52; 伏見2008.

10 *rnam thar nyi ma'i snying po*, 69b-67a.

11 Quintman; Tiso; 金子2008.

12 kun dga' 2006, 19.

13 kun dga' 2010, 2.

14 *mi la'i rnam thar*, p.275.

15 *bka' brgyud pa'i grub mtha'*, p.45.

16 『チベットの密教ヨーガ』pp.56-57; kun dga' 2009, 189.

17 zhad pa rdo rje. ミラレーパの密教における名前。

18 thugs kyi sras. 師と心の結びつきの強い弟子。

19 『ミラレーパ伝』第2部第4章でミラレーパが夢に4つの柱を夢見るが、東の柱はドル（dol）のツルトン・ワンゲ（tshur ston dbang nge）、南の柱はシュン（gzhung）のゴクトン・チュードル（rngog ston cho rdor）、西の柱はツァンロン（gtsang rong）のメートン・ツンポ（med ston tshon po）、そして北の柱をグンタン（gung thang）のミラレーパであるとマルパに夢を解釈される。更に、ミラレーパが北の柱に禿鷹が飛び回り、その禿鷹に1羽の子どもが生まれたのを夢見たと語ったことに対して、マルパはミラレーパのもとに「無比なる者がやってくる」と授記する（*mi la'i rnam thar*, pp.111-112）。

20 *mgur 'bum*, p.275.

21 ting nge 'dzin gyi rgyal po.（P. No. 795）

22 *'phags pa snying rje chen po'i pad ma dkar po*.（P. No. 779）

23 ba dan. 獅子とガルーダ、豹と魚、クンビーラと法螺貝、それぞれの間の子が載った旗が rgyal mtshan, 載っていない旗が ba dan.（zhwa sgab pa Vol.1. p.137）

24　yang la za とあるがこの za は元々女性を意味する bza′の添前字と添後字が落ちたものと思われる。これと同様に、ミラレーパの母親ニャンサ・カルモゲン（myang za dkar mo rgyan）のニャンサもニャン一族の女を意味する（クンガ氏の教示）。

25　『古タントラ解題目録』No.187, P. No.455や『古タントラ解題目録』No.457, P. No.457に『秘密心髄』に関する論書があるが、詳しくは未確定。

26　未確定。

27　*sman dpyad yan lag brgyad pa′i snyin po′i ′grel pa las sman gyi ming gi rnam grangs*.（P. No.4309）

28　ri は否定を含む堅い誓いの意志を表す。ri（re）の用例は、古くはソンツェンガムポ（srong btsan sgam po, 617-650）の記述に見られる（srong btsan sgam po 48）。

29　tsha tsha はアティシャ（a ti sha, 982-1054）の来蔵とともに今のような型に押して作る大量生産型になったとされる。アティシャは弟子が酒を飲んだため、彼を破門したが逆に相手の恨みを買い、僧院に留まることができなくなってチベットにやってくる。僧侶を仲違いさせるような離間語は罪が大きいので、その罪業を清めるためにアティシャが大量のツァツァを作ったという説がある（クンガ氏の教示）。

30　khu mtshan. khu bo と tsho bo が縮まった言葉。tsha が tshan と変化する例は、温泉を chu tsha と言わず chu tshan と言うように他にも見られる（クンガ氏の教示）。

31　thal ba は thal bar rlung bskur や thal bar brlag pa のように用い、「全てを破壊しつくす」といった否定的な意味で用いられる。チベットでは相手を罵ったり、怒りを表したりする場合に、灰を投げつける（クンガ氏の教示）。ミラレーパの母カルゲンも、家族が苦しい状況下であるにも関わらず、ミラレーパが歌をうたっていたことに腹をたてて灰を投げつけた（*mi la′i rnam thar*, p.30）。

32　jug thal だが ′jigs thal の意味で読む。チベット語で i の母音が e の母音と、u の母音が o の母音と入れ替わることがよく見られる。また添前字、添後字の変化もたびたび起こるので、今回は意味から ′jigs thal と推測する（クンガ氏の教示）。

33　*dpal gsang ba′i snyin po de kho na nyid rnam par nges pa*.（P. No. 455）

34　禅定（bsam gtan）の所断であるので、瞑想中の沈み込みと高ぶりを示す掉挙と昏沈（bying rgod）ととった。

35　生活の条件を厳しくすると、体内では腹に回虫がわいたり、体外では皮膚に虱がわいたりするがそうはならず、ラジェの生活が順調だったことを示す。

36　*gser ′od dam pa′i mdo*.（P. No.175）

37　thugs nyams. 心の感覚。

38　ミラレーパは修行を行った際に食料が全くなかったため、イラクサを煮た汁ばかりを飲んで身体が青色になってしまったと言われる。

39　pe dkar はもともとチベット語の gtsug lag khang を示すサンスクリット語の bih′ar が pe har に変化し、pe kar, pedkar と変化したものと考えられる（クンガ氏

の教示)。チベット語ではiの母音がeに、uの母音がoに変化することがたびたび起こるが、ここもその規則にのっとっている。

40 mkhan po には比丘に戒律を授ける人の意味と、寺院の座主の両方の意味がある。戒律を授けるためには15の条件を備える必要がある(dung dkar, pp.425-426)。

41 lung. 経典や論書に書かれた言葉を一言も残さず読み聞かせること。ルンの受け方の違いによって、生じる功徳なども違う(dung dkar. p.1959)。

42 gtor ma brgya rtsa. 本尊、福田、出世間の11の賓客に供物を捧げる儀式(gtor ma brgya rtsa 'bri gung lung)。

43 bsnyen pa bskyal ba. 直訳すると「本尊に近づく」だが、そこから「修行をする」の意味に。

44 nya ma. ダライ・ラマ7世は nya ma は女性の弟子を指すと書き残している。*mgur 'bum* にも nya ma は何度も出てくるが、主に女性の弟子を指して使われている場合が多い(クンガ氏の教示)。

45 「法を説いておられた」の意味。

46 ras pa. 布をまとった人の意味。ミラレーパに従い、彼と同じように布一枚だけをまとって修行に励んだ弟子たちのこと。

47 dom bhi he ru ka. (*grub thob brgyad chu rtsa bzhi'i lo rgyus*. P. No. 5091. 6a-7a; *bka rgyud pa'i grub mtha'*, p.8)

48 klu dga' bo. 密教に説かれる伝説の八大龍に調伏されていない龍王(*klu'i rgyal po dga' bo nyer dga' 'dul ba'i mdo*. P. No.755; dung dkar. p.116)。

49 'jog pa. 八大龍のうちの紅き龍で、南に住むという(*dung dkar*. pp.120-121; 中島88)。

50 gyad lha dga'. 八大龍との関係から、ここでは他化自在天(dga' rab dbang phyug)のことと推測する。

51 マイトリーパと呼ばれる人物は少なくとも3人は存在したと推測される(羽田野26)。

52 インドの行者マイトリーパの教えをナーローパが授かった。その教えをマルパ翻訳師がインドからチベットへと持ち帰り、ミラレーパへと伝えた(*thu'u kwan grub mtha'*, pp.112-115)。

53 lo tshod ma tshos se ba bre gang tsam byas/ 最初の lo は la phug の母音が変化したものと推測する。se ba は野菜の名前と思われる(クンガ氏の教示)。

54 gtung mo. チャンダーリの火。臍にある「変化輪」と呼ばれるチャクラや脈管にルンを自在に導き入れ大楽の炎を生じさせる(『チベットの密教ヨーガ』pp.102-110)。

55 phyag rgya chen po. (*bka' brgyud pa'i grub mtha'*, pp.306-324)

56 rag dung. 銅で作った長い笛。

57 mon. 現在の区分でいくと、インドのアルナチャル・プラデシュ州周辺地域。

58 sa は sa dang lam で十地と五道の意味にもとれるが、前の文章にくっついて mi

ldan sa と読むこともできる。その場合 sa は pa や ba と同じような働きをしていると考えられる。そのような sa の使用例は、他の文中にもしばしば見られる。sa を pa の意味で読むならば、ここは「道次第を学ぶ者たち」の意味になる。

59　この一文からも道次第の思想が読み取れる。

60　dbus long. 生まれつき目が見えない人。途中で目が見えなくなった人は long ba や zha ra。

61　dbud pa ston pa. 中央チベットの学者。これ以降ミラレーパはタクポ・ラジェのことをウーパ・トンパの愛称で呼ぶ。

62　de'i gdan thog mar sus mnan pa. この一文からは、「ラジェの座を誰が最初に準備するか」の意味と、「ラジェが座った席の後に、誰が最初に座るか」の 2 つの場合が考えられる。

63　mtshong 'dus. 商店が集まり商売の盛んだった町。

64　chang. 酒。一般的には蒸溜されていないものを指す。

65　福徳資糧(bsod nams kyi tshogs)と智慧資糧(ye shes kyi tshogs)の二資糧(tshogs gnyis) のうちの福徳資糧。

66　chos sku を示すサンスクリット語の kāya には「身体」と「集まり」の 2 つの意味があるが、ここでは身体よりも集まりの意味で取った方が詩の内容に合う(*sam bod rgya gsum shan sbyar gyi tshig mdzod*, p.32)。

67　ナーローの六法のうちの幻身と遷移と双入、六法のうちの夢、六法の光明を主とした究竟次第、六法のうち特にトゥンモ（*bka' brgyud pa'i grub mtha'*, p.4）また他の書には、父タントラ・グヒヤサマージャ、母タントラ・チャクラサンバラ、夢と中有の教誡、遷移と双入を 4 つの流れとする（dung dkar 2004a: 479)。

68　bka' brgyud. カギュー派の名称はタクポ・ラジェが bka' gdams の教えとマルパから続くマハームドラーの教えを融合させたため用いられるようになった。この段階で bka' bgyud を「カギュー派」と訳すのは不適切と思われるので「教えの伝統」と訳す（mkhyen brtse 146-147; *thu'u kwan grub mtha'*, p.108）

69　chab. ここでは zhal chab を省略した形と思われる。

70　mar khu は「溶かしバター」のことだが、この時代、この地方では油全般のことを指したと推測される。

71　赤い染料で作ったマンダラ。

72　gyad. 小さくて力持ちだが、お金を持っていないという想像上の生き物。

73　ang ge. a rogs', a 'o, a ge などと同様の呼びかけの言葉。

74　bying rgod skyon ma bsal. 昏沈と掉挙は瞑想中に起こる心の落ち込みと高揚の状態。本来瞑想においては取り除かれるべき状態である。しかし、ここでは昏沈と掉挙をそのままにせとよと述べている。このことから、本歌はカダム派などの影響を受けていない、ミラレーパの詩の中でも古い歌ではないかとも推測される。

75　大日如来、宝生如来、無量光如来、不空成就如来、阿閦如来。

76 地、水、風、火、空。

77 ro ma, rkyan ma.（『チベットの密教ヨーガ』pp.114-115）

78 phrul 'khor.（同上 pp.90-95）

79 同上 pp.78-79.

80 grog 'dzin gyi rlung. 命と関係のあるルンで、身体を上下に移動する（同上 pp.114-115）。

81 『八千頌般若経』*'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa khri brgyad stong pa*, P. No.732.

82 sum. 意味を確定しかねるが、ここでは「涼しい」の意味でとる。

83 mdo long. 模様の一種と推測。

84 sum gal. ヤクなどの家畜の両脇にかけて運ばせる荷袋と推測。

85 khri snyan. khri snyan s'a ra のこと。慈悲の動物で狩人から逃げる時、足下に注意を払い、虫を殺さないようにしながら逃げるという（クンガ氏の教示）。

86 ne'u thang. 小さな草の生えた湿地の草原地帯。草原の種類には他に na 'dam（泥の草地）、na thang（草地）、na zhung（広い草原）などがある。

87 『チベットの密教ヨーガ』pp.78-79.

88 幻についての譬えについては、幻、水面の月、錯覚、陽炎、夢、やまびこ、尋香城、手品、虹、稲妻、水泡、鏡像の12の譬え（*ye shes rdo rje kun las btus pa*. P. No. 84）や、星、眼病、灯明、幻、朝露、泡、夢、稲妻、雲の12の譬え（*'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa rdi rhe gcod pa*. P.No. 739）などがあるが、8つの譬えについては未確定（cf.khang dkar 369）。

89 yas mar. yas ba mas bstan はルンの修行の1つ（『チベットの密教ヨーガ』pp. 122-123）。

90 別解脱戒、菩薩戒、三昧耶戒。

91 dung dkar 2004a: 484-485.

92 自己の解脱を目指す声聞や独覚たちと、一切衆生の救済を目指す大乗者の立場の違いを対比させている。

93 密教において人が死ぬ際に現れの白（snang ba dkar lam pa）、増相の赤（mched pa dmar lam pa）、近得相の黒（nyer thob pa nag lam pa）の順で色が現れると説く（dung dkar 2004c: 738-739）。

94 gnyug ma.（dung dkar 2004b: 684-685）

95 sman bla mched bdun. 善名称吉祥王如来（mtshan legs）宝月智厳光音自在王如来（rin chen zla ba）金色宝光妙行成就王如来（gser bzang dri med）無憂最勝吉祥王如来（mya ngan med mchog dpal）法海雲雷音如来（chos grags rgya mtsho）法海勝慧遊戯神通如来（mngon mkhyen rgyal po）薬師瑠璃光如来（sman gyi bla ma）ここに釈尊を加えて八仏とする場合もある（*dung dkar*, pp.1642-1643）。

96 外道と共通したものと、他の宗教にない仏教だけにある最高の神通力。

97　信・戒・聞・捨・慙・愧・慧。

98　チベットにおいて医者は人々から尊敬されるとても名誉ある仕事である。それはラジェという言葉の中に lha（神）の言葉が入っていることからもわかる。チベットにおいて lha が用いられるのは、医者と lha bla ma ye shes 'od などのように王に対してだけである（クンガ氏の教示）。

99　ここにおいてカダム派の法とマハームドラーの教えが交わり、カギュー派となることを示唆するミラレーパの授記ともとれる言葉。

100　棒をさして羊毛を紡ぐために用いる穴のあいた石と、天秤として用いる曲がった木のこと。

101　『金光明経』*rdo rje theg pa'i sbom po ltung ba* P. No.3307; khang dkar 340.

102　skur 'debs. 善いことがあるのに無いと言うこと。一方、sgro btags は善悪に関わらず、無いものをあると言うこと（クンガ氏の教示）。

103　月の数え方は、遊牧民では酉を１月と数え、モンゴル暦では子を１月と数えるなど、種々多様な数え方がある（kun dka' 2009, 22）。

104　利得、損失、賞賛、避難、名誉、誹謗、楽、苦。

略号および文献表

一次資料

grags pa rgyal mtshan

rnal 'byor byang chub seng ge'i dris lan In *sa skya bka' 'bum*. vol.3. Toyo Bunko, 1968. pp.276-278.

rgod tshang ras pa sna tshogs rang grol

gtsang smyong he ru ka phyogs thams cad las rnam par rgyal ba'i rnam thar rdo rje theg pa'i gsal byed nyi ma'i snging po. In *The Life of the Saint of Gtsang*, New Delhi, 1969.（『ツァンニョン伝』）【略号 *rnam thar nyi ma'i snging po*】

sgam po pa bsod nams rin chen

mar pa dang mi la ras pa'i rnam thar. In *Collected Works of sGam po pa bSod nams Rin chen Reproduced from Manuscript from the bKra shis Chos rdzong Monastery in Miyad Lahul by Khasdub Gyatsho Shashin*. Vol.1. Delhi, 1975. pp. 16-26.（蔵外 No.11814）

'jam dbyangs mkhyen brtse

gangs can bod yul du byon pa'i gsang sngags gsar rnying gi gdan rabs mdor bsdus ngo mtshar padmo'i dga' tshal. In *'jam dbyangs mkhyen brtse'i dbang po' i gsung rtsom gces sgrig*. si khron mi rigs dpe skrun khang. 1989. pp.1-216.

thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma

thu'u bkwan grub mtha'. kan su'u rigs dpe skrun khang. 1984.

gtsang smyon he ru ka

rje btsun mi la ras pa'i rnam thar rgyas par phye ba mgur 'bum. In *rnal 'byor gyi dbang phyug mi la ras pa'i rnam mgur*. mtsho sngon mi rigs rigs dpe skrun khang, 1981. pp.214-812.（『ミラレーパの十万歌』）（蔵外 No.11856）【略号 *mgur 'bum*】

rnal 'byor gyi dbang phyug dam pa rje btsun mi la ras pa'i rnam thar thar pa dang thams cad mkhyen pa'i lam ston In *rnal 'byor gyi dbang phyug mi la ras pa'i rnam mgur*. pp.1-195 & pp.813-874,『ミラレーパ伝・解脱と一切知者への道説示』）（蔵外 No.11854）【略号 *mi ra'i rnam thar*】

dge slong zhi byed ri khrod pa

rje btsun mi la ras pa'i rnam par thar pa nyi zla'i 'od zer sgron me. In *'bri gung bka' brgyud chos mdzod chen mo*. Vol. ta. Lhasa, 2004. pp.247-494.（『ミラレーパ伝・太陽と月の光』）【略号 *rnam thar nyi zla'i 'od zer*】

srong btsan sgam po

In *bod kyi brda rnying yig cha bdams bsgrigs*, krung dbyang mi rigs slob grwa chen mo'i dpe skrun khang, 1995. pp.45-48.

bsod nams lhun grub

mnyam med sgam po pa'i rnam thar. mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 1993.（『ガンポパ伝』）

二次資料

kun dga' dbang phyug

2006 "rje btsun mi la ras pa'i mgur ma byung ba'i rgyu rkyen la dpyad pa." *mtsho sngon mi rigs slob grwa chen mo'i rig gzhung du deb*, pp.19-34.

2009 *dus rabs bcu gcig pa'i nang du byon pa'i bod kyi rnal 'byor ba mi la ras par dpyad pa*. 西北民族大学博位請求論文

2010 「ミラレーパ研究の価値」（大谷大学真宗総合研究所における口頭発表、2010年12月14日）

khang dkar tshul khrims skal bzang

1994 *rgya gar gyi nang pa'i gsang sngags kyi lta grub kyi chos 'byung*. nyin bod nang rig deb grang IV. gangs ljongs nang rig mthun tshogs.

khro ru mkhan po tshe rnam

1989 *dpal myam med mar pa bka' brgyud kyi grub pa'i mtha' rnam par nges par byed pa mdor bsdus su brjod pa dwags brgyud grub pa'i me long*. In *gangs can rig brgya'i sgo 'byed lde mig. deb bcu gsum pa*. mi rigs dpe skrun khang.【略号 *bka' brgyud pa'i grub mtha'*】

dung dkar blo bzang 'phrin las

2002 *dung dkar tshig mdzod chen mo*. krung go'i bod rig pa dpe skrun khang.【略号 *dung dkar*】

2004a *chos lugs grub mtha' khag gi gzhi rtsa'i shes yon mdzub mo ri ston*. In *mkhas dbang dung dkar blo bzang 'phrin las kyi gsung 'bum. kha. grub mtha'i skor gyi rnam bshad*. mi rigs dpe skrun khang. pp.1-543.

2004b *dpal ri bo dge ldan pa'i grub mtha'i rnam gzhag dngos bshad pa*. In *mkhas dbang dung dkar blo bzang 'phrin las kyi gsung 'bum*. kha. *grub mtha'i skor gyi rnam bshad*. pp.544-735.

2004c *dga' ldan snyan brgyud bla ma'i rnal 'byor dang 'brel ba'i bsre ba sgom tshul gyi man ngag*. In *mkhas dbang dung dkar blo bzang 'phrin las kyi gsung 'bum. kha. grub mtha'i skor gyi rnam bshad*. pp.736-754.

don grub rgyal

1997 《*mi la ras pa'i rnam thar*》 *gyi rtsom pa po'i lo rgyus*. In *dpal don grub rgyal gyi gsung 'bum. pod gsum pa. dpyad rtsom phyogs bsgrigs*. mi rigs dpe skrun khang.

rnam rgyal tshe ring

1991 *sam bod rgya gsum shan sbyar gyi tshig mdzod*. mi rigs dpe skrun khang.

zhwa sgab pa dbang phyug bde ldan

1986 *bod kyi srid don rgyal rabs: zhwa sgab pa dbang phyug bde ldan gyis sbyar ba'o*. Kalimpong, W. B. Shakabpa House.

gtor ma brgya rtsa 'bri gung lung. TBRC RID: W23903.

Marin, Dan

2001 *Unearthing Bon Treasures: Life and Contested Legacy of Tibetan Scripture Revealer, With a General Bibliography of Bon*. (Brill's Tibetan Studies Library, vol.1) . Brill Academic Publication.

Quintman, Andrew

2006 *Mi la ras pa's Many Lives: Anatomy of a Tibetan Biographical Corpus*. A dissertation submitted in Partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy (Asian Languages and Cultures: Buddhist Studies) in The University of Michigan.

Tiso, Francis V.

1990 *A Study of the Buddhist Saint in Relation to the Biographical Tradition of Milarepa*. University Microfilms International.

The Tibetan Buddhist Resource Center. http://www.tbrc.org.【略号 TBRC RID】

大谷大学図書館

1993　『大谷大学図書館所蔵 西蔵文献目録』大谷大学図書館【略号 蔵外 No.】

金子　英一

1982　『古タントラ全集解題目録』国書刊行

2003　「ミラレパ伝の変遷」『佐藤良純教授古稀記念論文集：インド文化と仏教思想の基調と展開』第1巻、山喜房佛書林、pp. 47-61.

ガンポパ

2007　『解脱の宝飾』ツルティム・ケサン、藤仲孝司訳、星雲社

杉本　恒彦

2000　『八十四人の密教行者』春秋社

立川　武蔵

1987　『トゥカン『一切宗義』カギュ派の章』（西蔵仏教宗義研究 第五巻）東洋文庫

ツォンカパ

1999　『チベットの密教ヨーガ　深い道であるナーローの六法の点から導く次第　三信具足』ツルティム・ケサン、山田哲也訳、文栄堂【略号『チベットの密教ヨーガ』】

中島　小乃美

2010　「『一切悪趣清浄儀軌』にみる天部」『サラスヴァティー』創刊号、pp. 73-92.

羽田野　伯猷

1959　「Tantric Buddhism における人間存在」『東北大学文学部研究年報』9号、pp. 327-249.

伏見　英俊

2008　「チベット木版印刷プロジェクトとその構成メンバー」『東アジア文化交渉研究』創刊号、pp. 263-276.

渡邊　温子

2010　「逆縁としての母―ミラレーパを育むニャンツァ・カルゲン」『印度学佛教学研究』58巻第2号、pp. 1026-1033.